

研究ノート

エウリュディケー異説

近 藤 裕 子

目次

1. はじめに一オイディプス王のモチーフから
2. マレー作品のエウリュディケー
3. おわりに—ユリディスはイギリスらしいのか？

1. はじめに一オイディプス王のモチーフから

これまで、エウリュディケーの古典的なモチーフについて、いわゆる王道の視点から検討を続けてきた。王道というのは、彼女が理不尽な死を迎えたことに対して、夫オルペウスが冥界に彼女を取り戻しにいくという筋の展開である。いくつかの作品においては、オルペウスを嫌って、地上に戻りたくないというヒロインの変容をみることもできたが、オルペウスの冥界下りのモチーフ自体に変化はなかった。今回とりあげるエウリュディケーはこのパターンとは異なる女性像である。

本論考で主となるエウリュディケーの前に別のエウリュディケーを先ずみておきたい。

運命に弄ばれるオイディプスの悲劇は古代ギリシアの悲劇詩人たちが取り上げたテーマである。自分の父親を殺め、母親を娶るであろうという託宣を避けるために旅に出たオイディプスが、老人を殺めることになってしまう。その老人ラーイオスこそが実の父親であり、王不在（先の老人）となっている都市国家で、王妃イオカステ（実の母親）と結婚し支配者となる。しかしながら出生の秘密を知り、自分自身のことが何も見えていなかったとして、目を衝いてしまう。

この一連の出来事のどこに、エウリュディケーは登場してくるのか。オイディプスの娘、アンティゴネーとの関わりの中で扱われることになる。オイディプスが王位を退いたのち、息子二人が王位をめぐる争うことになるが、共に刺し違えて死に、そのあと、アンティゴネーは二人の兄弟の弔いを行った。国を攻めた反逆者を弔うことは禁止されていたが、アンティゴネーは肉親の情から二人の兄弟、国を守った者と攻めた者を分け隔てなく弔ったのであった。このため、叔父でこのとき、支配者となっていたクレオンからアンティゴネーは死を命じられる。彼女の婚約者でクレオンの息子、ハイモーンも自ら死を選ぶ。ハイモーンの母親（クレオンの妻）は、別の息子

(犠牲になって自死した)に次いで、ハイモーンまでもが死んだことを嘆き、自ら死を選ぶ。この女性の名前がエウリュディケーである。オイディプース、アンティゴネーにまつわる話の中でこのエウリュディケーは脇役であり、その死が夫のクレオーンにショックを与えたとしても、注目をあつめる人物ではない。

オルペウスの妻のエウリュディケーと違って、クレオーンの妻のエウリュディケーは自ら死を選んでいるが、どちらもこの世から死んでいなくなるという点では共通している。エウリュディケーという名は、死を意味する、連想させる名前なのだろうか？

2. マレー作品のエウリュディケー

18世紀のイギリスで上演されたいくつかの作品で、エウリュディケーが冥界まで迎えにきた夫オルペウスに対して物申すようになり、強い個性をもつようになるという、古典的な人物像からの彼女の変容については以前考察した。(近藤、2020) エウリュディケーが強くなるといっても、オルペウスの新妻であり、理不尽に死んでしまったことで、オルペウスが冥界に連れ戻しにくるという枠組み自体が変わるわけではなかった。

本論考の本命というべきエウリュディケーは、スコットランド出身のDavid Mallet (1705-65) の *Eurydice* という作品に登場する。ここで扱われるエウリュディケー(英語名はユリディス)は古典のエウリュディケーとは全く異なっている。音楽の才に恵まれたオルペウス、ハーデースが支配する冥界の世界も登場しない。(古典のエウリュディケーと区別するために、これ以降、マレーのエウリュディケーの方はユリディスと表記する。)

ユリディスはコリントの王妃として登場し、その夫であるコリント王(Periander)は、嵐で消息不明、EpidaurusのProclesがコリントを手中にしようする。プロクリーズはユリディスも自分のものにしたいと思うのだが、ユリディスは夫のことを想い続けている。その後ペリアンダーは無事が確認されるが、プロクリーズに囚われの身となる。ユリディスは夫を助けるためにプロクリーズの意に従おうと考える。その後、家臣たちの手助けもありペリアンダーは無事、国を取り戻すことに成功するのだが、妻ユリディスの貞節を疑う。ユリディスは毒を飲み、自らの潔白を主張して死ぬ。妻の本心を知ってペリアンダーもあとを追って自殺するという悲劇である。

この話のもとになったのは、スコットランド出身でスチュアート王家支持のChevalier Ramsay (Andrew Ramsay, 1686-1743) の *The travels of Cyrus* (1727) と言われている。Cyrusが旅した各地に伝わる話を集めたこの本では、王妃はユリディスではなく、Melissaという名前で登場する。(メリッサはマレーの台本ではユリディスの侍女の名前である。)ラムゼーの本では不貞を疑う夫によって王妃である妻は殺害される。真実を知った夫ペリアンダーは後追い自殺を図るが止められてしまう。その後、地位を譲ろうとした息子も殺害され、絶望の中でペリアンダーは策を講じ、自らをペ

リアンダーと知られぬままに殺害させ、海に遺棄させる。誰にも知られずこの世を去るといふ、残酷で哀れな死の結末である。

マレーの *Eurydice* は1731年2月22日に初演、2月中に6回、3月に7回、4月に1回上演された¹⁾。参考文献にあげた② (Nussbaum, ed.) に掲載されている台本は1731年版であり、ペリアンダーは Mr. Mills が演じている。参考文献① (Mallet) はドゥルーリー・レーンの王立劇場で上演された台本 (1795)²⁾ で、当時の名優ギャリック (David Garrick, 1717-79) がペリアンダーを演じていた。当代切っのシェイクスピア役者と言われ、名声はヨーロッパ大陸にまで轟いていた。³⁾ 1759年、初演以降およそ四半世紀ぶりに再演されたこの演劇、ギャリックが演じたにも関わらず、ドゥルーリー・レーン劇場のプロンプター、Richard Cross が“dull”という言葉を残して興味深い。⁴⁾

以前、ギリシア神話に登場するイーピゲネイアの変容について共同研究していた折、トロイア戦争に関連する本来のイーピゲネイアではない別系統のイーピゲネイアがイギリスで上演されていたことを指摘した。⁵⁾ イギリスでは、ギリシア神話のモチーフについて、異系統の作品を好む傾向が存在するのであろうか？

1660年の王政復古で、それまで不道徳として共和政時代、閉鎖されていた劇場は再開される。その後、ロンドンにおけるペストの流行 (1665)、ロンドンの大火 (1666)、名誉革命 (1688)、責任内閣制、ロマン派の登場、産業革命などを経て、イギリスは大英帝国への道をすすんでいく。大陸

1) 2月22、23、24、25、26、27日と3月1、2、4、6、9、11、13日及び4月26日である。(LS, Part 3, Vol 1, pp. 118-33.)

2) この台本の表紙にはMDCCXCVと書かれているので1795年になるが、これは出版年であり、ギャリックの死後にあたる。②の本の中で、少し変更を加えギャリックが再演したのは、1759年3月3日とあり(p. xix)、こちらが実際の上演年と考えられる。

3) 音楽学者 Charles Burney (1728-1814) が大陸へ音楽の旅に出かけた際には、ギャリックから多くの紹介状をもらっていたという。(Cf. Burney, p. 22)

4) Cf. LS, Part 4, Vol. 2, p. 713.

5) イーピゲネイア (イフィゲネイア) の名前で知られるギリシア女性のモチーフには、トロイア戦争関連以外のものもある。イーピゲネイアの姿を見て感動したチモーネが恋ゆえに賢くなる物語である。彼は人間というよりも野獣的な存在として扱われていた。しかしイーピゲネイアの姿をみて知性に目覚め、最終的には万難を排して、彼女をその婚約者から奪いとる。このパターンは、ボッカチオの『デカメロン』の中に登場し、ミレー (John Everett Millais) などの絵画のモチーフになっている。ギャリックは *Cymon* (1767) の劇を上演している。チモーネの方が当時のイギリスの観客にとっては身近だったと思われる。(近藤 他, 2015)

サイモン (チモーネの英語名) はシルヴィアとの真剣な恋によって知性的な人格を取り戻すが、イーピゲネイアの名は、そこにはない。魔法使いなども登場するこの劇は、例えば、1767年1月2日-2月16日の間においては、24回上演されていた。(Cf. LS, Part 4, Vol. 2, pp. 1208-21.)

に亡命していた貴族たちが王政復古期に爛熟した大陸文化を持ち帰るが、その一方で風景式庭園もその1つであるが、イギリスらしさがはっきりその形を表すようになってくる。

イギリス18世紀前半を代表する諷刺詩人ポウプ (Alexander Pope, 1688-1744) は古典派 (擬古典派) の詩人であり、ホメーロスの『イーリアス』、『オデュッセイア』を彼自身の解釈に基づいて英訳した。また、大陸風の樹木を刈り込むトーピアリを批判し、テムズ河畔の彼の庭はイギリス風景式庭園の初期様式とみなされている。同時代の三文文士を揶揄した『ダンシアッド』 (*The Dunciad*, 3巻本 1728, 4巻本 1742) は極めて辛口の諷刺となっているが、その中で当時、流行した大陸へのグランド・ツアーを取り上げ、貴族の子弟が大陸で研鑽を積む代わりに遊興三昧して帰ってくるさま、またオペラに現を抜かず姿も揶揄している。ここでいうオペラは大陸のオペラを指し、言葉が完全にわかってはいないのに有り難がる、あるいは社交場としての劇場文化に酔いしれるさまと解釈できる。以下の引用は第4巻の愚鈍の女神の宮廷に伺候する若者たちを描いた場面の一部である。

Others the Syren Sisters warble round,
And empty heads console with empty sound.
.....
Why all your Toils? your Sons have learn'd to sing.
How quick Ambition haste to ridicule!
The Sire is made a Peer, the Sons a Fool. (Book IV, ll. 541-42, 546-48.)

18世紀のイギリスでは、ドイツから帰化した宮廷お抱えのヘンデル (George Frederick Handel, 1685-1759) が大陸から歌手たちを呼び寄せ、イタリアオペラのブームを引き起こしてはいたが、政治諷刺を含んだゲイ (John Gay, 1685-1732) の『乞食オペラ』 (*The Beggar's Opera*, 1728) が英語によるオペラであったため、大人気を博した。(DelDonna, p.207)

ポウプは先に述べた『ユリディス』 (*Eurydice*) の初演を見に行きたいとマレーに宛てて手紙を書いている。“I will try to determine to morrow [sic.] in what manner to go to the Play, if my health permits it, ...”⁶⁾ キリスト教徒であったポウプはまた、スチュアート王家 (ジャコバイト) 寄りであった Bolingbroke (1st Viscount; Henry St. John, 1678-1751) とも親しく、スコットランド出身のマレー

6) Pope to Mallet (18 February 1730 / ?) 引用した書簡集の編者、George Sherburnはこの日付が1731年2月22日の初演直前のものとしている。19世紀に編纂されたポウプの作品集 (書簡集) の編者、Elwin は1729年11月にマレーがポウプに『ユリディス』の作品について相談していると指摘している。(Cf. Vol. X, p.80)

を理解できる立場であった。⁷⁾

いわゆるオルペウスの妻のエウリュディケーを扱った作品がある一方で、ユリディス作品も舞台にかけられていた背景には何があるのでしょうか？

3. おわりに—ユリディスはイギリスらしいのか？

マレー作品もまたその元になったラムゼーの本においても、ユリディス（ラムゼーにおいてはメリッサ）の夫、ペリアンダーがその地位を危うくさせられてしまうことが、主筋である。マレーもラムゼーもスコットランド出身であり、名誉革命で王座を奪われたスチュアート家支持者（Jacobite）であった。⁸⁾ Nussbaum（参考文献②の編者）はハノーバー朝のGeorgeIIを中傷する作品であると述べている。（p. xvi）

マレーの『ユリディス』を再演したギャリックは、イーピゲネイア（イフィゲネイア）のモチーフにおいても、注5で指摘したように別系統を上演した。彼はシェイクスピア俳優として有名であったが、夫に不貞を疑われる妻を描いたシェイクスピア作品といえば、『オセロ』（*Othello*）があり、妻のデズデモーナは夫に殺害され、オセロ自身も真実を知って、自害する。18世紀前半（Augustan Period）と比較して世紀後半、ギャリック活躍の時代（Garrick-High Georgian Period, 1747-76）において、『オセロ』の上演回数は1.5倍に増えていて、観客に支持された演目であったと推測できる。⁹⁾ 『ユリディス』はジャコバイトの要素とシェイクスピアの要素が融合された作品であり、『オセロ』と似た展開をとっていて、ギャリックにとっては、特に違和感はなかったであろう。ただ、ギャリックによる再演は1759年であり、1746年のBattle of Cullodenによってジャコバイトの反乱は一応制圧されているため、時事的な関心は薄らいでいたと考えられる。

オセロはムーア人という人種的コンプレックスによって、妻の浮気という噂に振り回され、嫉妬のとりことなり、妻を殺め自分も命を絶つことになる、人間性を根底に据えた悲劇である。一方、『ユリディス』はペリアンダーが自分の国を奪われそうになる、王位篡奪の危機的状況の中で、冷静さを失い、妻を疑って死に至らしめ、自分の死をも招くという外因的な要素を土台とする悲劇といえよう。人間性を扱っていて普遍性のある前者の方が、人々に作品として、より受け入れられ、時代性を超えられると考えられる。

ユリディスはオルペウス、冥界が登場する古典のエウリュディケーとは全く異なる女性像であ

7) ジャコバイトが政権を奪取できていれば、非国教徒のポープは庇護を得られた可能性もあったと指摘されている。（Rogers, 116-17.）

8) ラムゼーはヨーロッパ大陸に長く滞在し、老潜王（The Old Pretender）と称されたJames Francis Edward Stuart（1688-1766）、またその息子たち（Charles Edward（若潜王）とHenry）と接点があった。

9) 80→124公演回数へと増えている。Cf. Hume, p.199.

り、当時の政治状況を背景に、イギリスの土壌故にこそ生まれた女性像であると考えられるのである。

参考・引用文献

- 杵掛良彦、[2021]、『オルフェウス変幻—ヨーロッパ文学にみる変容と変遷』、京都大学学術出版会。
- 近藤裕子・永井典克・大崎さやの、[2015]、「ヨーロッパ近現代におけるギリシア悲劇の女性像の変容（1）—イーピゲネイア」（研究ノート）、『東洋大学 人間科学総合研究所紀要』第17号。
- 近藤裕子・十重田和由・永井典克、2016]、「ヨーロッパ近現代におけるギリシア・ローマ神話の女性像の変容（2）—エウリュディケー」（研究ノート）、『東洋大学 人間科学総合研究所紀要』第18号。
- 近藤裕子、[2017]、「エウリュディケーのヒロイン像をめぐる一考察」、『東洋大学 経済論集』第42巻2号。
- 近藤裕子、[2020]、「エウリュディケーの変容」、『東洋大学 経済論集』第45巻2号。
- ソポクレス、(中務哲郎 訳) [2014]、『アンティゴネー』、岩波文庫。
- 福本宰之、[2020]、『「ダンシアッド」における風刺の研究』、晃洋書房。
- Avery, Emmett L. et al. (eds.), [1960-68], *The London Stage 1660-1800*, 5 vols. in 11 books, Southern Illinois U.P. (言及の際にはLSと略記する。)
- Burney, Charles; Scholes, Percy A. (ed.), [1959], *An Eighteenth-Century Musical Tour in France and Italy*, Oxford U.P.
- Butt, John (ed.), [1939-69], *The Twickenham edition of the poems of Alexander Pope*, 11 vols., Methuen. (*The Dunciad*は Vol. V, 文中の引用はこの版からとし、末尾のカッコ内に行数を示す。)
- DelDonna, Anthony R. & Pierpaolo Polzonetti (ed.), [2009], *The Cambridge Companion to Eighteenth-Century Opera*, Cambridge U.P.
- Elwin, Whitwell & William John Courthope, [1886, rep. 1967], *The Works of Alexander Pope*, 10 vols., Gordian Press.
- Garrick, David, [1767], *Cymon A Dramatic Romance*, T. Becket and P. A. De Hondt.
- Hume, Robert D. (ed.), [1980], *The London Theatre World, 1660-1800*, Southern Illinois U.P.
- Mallet, David, [1795], *Eurydice a Tragedy*, The Theatre-Royal Drury-Lane.①
- Nussbaum, Felicity A. (ed.), [1980], *The Plays of David Mallet*, Garland Publishing, INC.②
- Ramsay, Chevalier, [1755], *The travels of Cyrus*, Volume 1 of 2, Gale ECCO Print Editions.
- Ramsay, Chevalier, [1729?], *A new cyropædia; or the travels of Cyrus*, Volume 2 of 2, Gale ECCO Print Editions.
- Rogers, Pat, [2005], *Pope and the Destiny of the Stuarts*, Oxford U.P.
- Sherburn, George, (ed.), [1956], *The Correspondence of Alexander Pope*, 5 vols., Oxford. (文中の引用はVol. III から。 p.177.)